

[016] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10254>

出版情報：語文研究. 16, 1963-06-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



故春日政治先生遺影

故春日政治先生追悼号によせて

九大国文科の初代教授として、現在の国語学国文学科の基礎をお築きになられた春日政治先生が八十五歳の御高齢でお亡くなりになられてから、はやくも一周忌を迎えることとなった。

先生の九大御在職中はもとより、御退官後もお亡くなりになるまで福岡の地にお住まいになり、わたくしどもの講座や在学生・卒業生・後輩の事を常にお心にかけて御指導いただいた事はもちろん、学徳共にお勝れになった先生が、日本学士院会員として、はたわが国学会殊に国語国文学界の長老として、お尽くしになられた御功績の偉大さは今さらいうまでもない。

本号は春日先生が、国文学科及び新制大学院御在職中親しく御指導を受けた卒業生及び九大国語学国文科の現旧教官の論文または春日先生の追憶を集めて、特集号を編み、謹んで故先生の御霊前に捧げることにした。まことに貧者の一灯ではございますが、わたくしどもの微意をお受けいただきますようお願い申し上げます。

昭和三十八年六月

九大国語国文学会代表 福田 良輔

春日先生を思ふ

高木市之助

「春日先生が御病氣だから」と或る用事の序に小島吉雄さんからお便りがあつた時に、私は始めて先生の御不例を知つたのだが、私は先生の御高齢にも拘わらず、何となくたいしたことはなさそうに思われたので、あんまりことごとしい御見舞状を差出しては却つて失礼のような気がして、どの程度の御病氣か小島さんに問い合わせた。ところが、その御返事を頂く前に御訃報が来てしまつたのだつた。

先生の思出を古小鳥のお宅と切りはなすことは出来ない。私がお宅へ伺う時は、きまつて城南線の電車でお訪ねした。降りると南へ曲る稍急な坂道があつて、そこを半ば登つたところから左の方へお宅専用の石段がある。石段を登りつめたところに、格子戸の玄関のついた小じんまりした、いわば先生好みのお宅が実に森閑として、訪客を待つまでもなく、もちろん拒むでもなくいかにもさりげなく建っている、ベルを押すと奥様が出て来て、別に社交的というのではないが、誠に善意に充ちて親しく私を招き入れて下さるのだつた。私の訪問は（というよりも誰の訪問でもある）いつでもきまりきつてこうだつた。私が福岡居住中に訪問した知人は数限りもないが、これほどいつも同じ型にはまつていて、しかも淡々とした千篇一律さの中に滋味があふれる場合は他に思い出すことが出来ない。そうした千篇一律の中で年に一回だけ型破りの私の訪問があつた。それはお正月の年賀の訪問である。というとかにも礼儀正しいが、実はその反対である。一体春日先生がお酒を召しあがらなかつた（召しあがれなかつたのではないと思う）つぐないでもあるまいが、当時九大国文研究室の連中はどうものんべが揃つていた。これ以上名前を披露することはよそう。周知の事実だから披露の要なしと言つた方がかどが立たな

い。その彼等が正月ともなればおよそどのような年賀の形態になるかは想像にあまりがある。さすがに年賀という名前にふさわしく、彼等は脱線することなく彼等の家庭から家庭へと飲みまわるのだが、時には他学科の連中と合流したりする中に夜は深更に及ぶ。その後、言いかえると一応飲みあきた後、われら国文学の連中はよく、だきがまわって、春日邸へ年賀に訪問したものだ。この時ばかりは森閑とした邸内もわれわれの非礼な訪問によっていささか喧騒になったことと、ざんきに堪えないが、もつとも吾々は先生のお宅で場ちがいのお酒を頂戴するつもりもなければ、先生や奥様にしてもこれ以上酒を与えて吾々を乱心させようともお考えにはならなかったにちがいない。そこで頂戴するのが、少なくとも私にとっては、お宅で、年に一度しかありつけないお雑煮だったのである。それは先生の御郷里の信州の風習だと承った、くるみを入れた、何とも言えない天下第一のお雑煮だった。われわれはいや私はそれをねらってそろ／＼酔い疲れのしたからだを古小鳥の坂上まで搬んだわけではもちろんないけれども、唯あの坂を、そろ／＼と上りつつ、あのおぞうに思い出したことは残念ながらほんとうである。思出話をなぜこないやしいたべ物へ持って行ったかという、それはわが先生の風格が実にこのくるみの御雑煮に似ていたからである。先生を酒に例えて酔の酔なるものなどということは当らないばかりか非礼でもある。かといって甘党らしくながし屋の羊かんなどにたとえたところでびんとは来そうにもない。ただあのくるみのお雑煮の持つ風味、素撲でしかも素撲を越えたしなやかな、信濃の國の持ち味こそは東京や京都や博多などではめつたにお目にかかることの出来ない、わが春日先生の尊貴な風格ではなかったかと、御他界後一層しみじみと思ひ出すのである。

次に別の話だが、学会やその他予餞謝恩等々の大小の催しにも義理がたい先生は必ず御出席になった。そんな時私が先生を大きく見直した一事がある。それはかねてから先生の御専攻を存じあげ、お宅へ伺ってもそんな方面の御話ばかり承り慣れていた私は、先生の卓抜な語学的な頭脳には敬服していたのだが、こうした宴席で先生近く坐ることによって、私は先生がこれとおよそ対蹠的な才能の持ち主でもあることを発見したということである。例えば仮りに私が何かの駄じゃれをとばしたとしよう。それが先ず通じるのは先生で、先生はつつましく小声でホッホと笑われ、しばらくして(はチト大げさだが)皆がどつと来る。これはただの語学鼠ではないぞ。と

驚くというよりもむしろ恐れをなしたものだ。そして先生のように、旧制の大学で国語学国文学という講座を一人で担任されたのは希有の例であり、仮令小島さんのような俊秀な若手(当時の)を擁していたとしても、それは先生にしてはじめてよくなし得た芸当だと今更のように感心したものである。

先生の思出は尽きないが、先生に多年しんしゃ(親炙)した方々が、もつと生き生きと、話して下さるのに譲らう。ただ私は日頃私の周囲を見まわして、一番長寿を保ち、且つ学問的にも一番スタミナなお方として実はわが春日先生を第一に推していた。それに趣味的にいつても何かに凝るとか淫するとかいうこともなさそうだし、何一つ不養生もなさらない。悠々たるかな先生の人生!あつという間に米寿白寿と訪れるにちがいないと私は九大の旧同僚卒業生などとよく話しあっていたのに、こんなに今頃(というのは常識ではおかしいが)おなくなりになるなんて、逆に奇蹟みたいに思われてならないのである。

本 と 書

田 村 専 一 郎

先生に最初お目にかかったのは本についてであつたと記憶する。その後もお目にかかったのは本についての場合が最も多かつた。

先生は明治大正のよき時代に、京都奈良のよき場所で、よき本を多く御覧になり蒐集して居られた。それ故にこそ例へば百万塔の陀羅尼の異版も全部そろつたのであつて、私どもの頃になるとさういうことは、もうとても手のとどかないことであつた。併し私どもの集めた頃も、今日から振り返つて見ると、亦よき時代であつたと思ふ。

ながらへばまたこの頃やしのばれむ

この感慨は本の世界に於ても同じことであると思はれる。

先生の本の見方は極めてこまかいものであった。版は勿論表紙題簽を始めとし綴系の末に至るまでこまかに見られた。併しそれらについて一々語るといふやうなお方ではなかった。こちらからお尋ねすれば教へて下さるといふ風であった。私が木活字本の展観を催した時などは、多くの御蔵書を拝借した上に、陳列のことまで何かと御教示をいただいた。本の道に於いて私は初め浅井虎夫先生の指導を受けたが早く亡くなられた。そして後は専ら先生の教を仰いだ。

私は先生にお尋ねしたいと思ひながら終に果さなかつたことが幾つかある。その一つは先生の学書歴についてである。従つて先生が若い時からどんな人を習つて来られたかは詳かにしないのであるが、その書が誰に似てゐるかと考へると、先づ考へられるのは言道である。実際先生は言道がお好きであり、多く集められ、そのため福岡の言道の値が上つたのも事実である。併し先生の書風は当地赴任前からのものであらう。その頃から言道を習はれたとは思へない。

先生の書はその人柄を偲ばせる温潤玉の如きものである。私はよく御無理をいつて書いてもらつた。或時短冊を持つて行つて御依頼して置いた。それからずつと後になつて、私の停年の会に出席して下さつた先生は「短冊は書きにくいからお返しする」とおっしゃつて包を渡された。私は不敏にして先生の意を解せず、唯お言葉通りに解して帰つて開いて見ると、筆の跡もうるはしい短冊が現はれた。

私に取つてはこの会が先生の醫咳に接した最後となつてしまつた。

短冊帳に挟んだこの短冊を見る度に、私は含蓄あるあのお言葉を思ひ出しては先生を偲んでゐる。

春日先生を憶ふ

小島吉雄

春日先生に対する憶ひ出は尽きない。三十七・八年も先生に近侍してゐたのであるから、それは当然のことであるが、その憶ひ出のかずかずが、すべてこれ、暖かくなつかしく、追慕の情をさそふものであるといふことは尋常のことではない。先生の人柄の、いかに素晴らしかつたかといふことが、今さらながら、思ひしのばれるのである。

先生には、信州人特有の、自己のペースを堅持して紊さないといふところがあつた。それでゐて、また、他人の気持を察して、その気持をいたはり育てようとする一面があつた。いはゆる苦勞人であると言はれる所以である。先生が法文学部長であり、図書館長であつた時分には、事務職員に大変人気があり、小使までが、先生を徳とし、先生を慕つたといふ事実がある。

先生が、まだ国文科の主任教授の頃のことであるが、学生の就職のためにその学生の下宿まで先生自ら足を運ばれるので、わたくしは、「そんなにまでしなくてもよろしいではないか、お宅へ学生をお呼び寄せになったら」と申しあげたら、先生は心持ち顔を赤らめて、「しかし、さういふわけにも行きませんからなあ」とおっしゃつて、相変らず自分から足を運ばれた。後年、わたくしは、この先生のやり方が、教育者として本當の姿だと思ふやうになつた。そして、出来るだけ、先生のこの態度と心構へとを学ぼうと心掛けた。

戦後、先生は、ある国立新制大学の学長に迎へられようとして、わたくしに相談して下さつた。わたくしは、それをお引き受けにならないやうにと進言した。真意は、先生の晩節を全うしていただくために、俗塵にまみれていただくくなかつたのである。先生は、わたくしの真意を汲み取つて下さつたやうであつた。

先生は、全くあらゆる君子の徳を具備した人であった、それは、恐らく先生の自己修養のたまものであったのであらうが、そのうちで謙讓と中庸の美德は、先生の生來のものであったと思はれる。老來の先生は、出来るだけ若い者に迷惑をかけないやうにと心を使ってをられたやうである。しかも、一方では、また後進の学を顕賞するために骨身を惜しまず努められた。

学者の生命は、向上心にある。先生は亡くなられるまで、研究をやめられなかった。但し、人格の裏づけのない学問は無意味であるが、先生の場合は、その人格と学問とが渾然一体となつてゐた。わたくしは、先生の学問を尊いものと思ふ。同時に、先生のやうな学者を失つたことを、心から惜しいと思ふ。

先生は、また、すぐれた教育者であつた。若い人の心に入つてゆける教育者であつた。わたくしは、およそ、先生とは違つた、至らぬ性格の持ち主であるが、教育者としての先生、また学者としての先生に教へられるところがあつた。わたくしは、一步でも先生に近づかうと努力した。そのみではない、処世の上でも、少しでも先生の轍を踏みたいと冀つた。卑近な例を言へば、金の使ひ方である。先生は、決してむだづかひをせられなかった。ご自分の日常生活はつましかなかったが、しかし少しも物惜しみせられなかった。適切に財を散ぜられた。生きた金の使ひ方をせられた。一銭をおろそかにはせられなかつたにかかはらず、先生ほど金の生かし方を知つてゐる人は珍らしいことであつた。また、先生の人のつきあひは、誠実そのものであつた。目下の者の冠婚葬祭にも、礼を欠かされることなく、絶対になかつた。これらのことは、なかなか言ふに易く行ふに難いことである。わたくしは、かういふ先生に敬服した。そして、自分の平素の心掛けを反省する資とした。先生は、わたくしにとつて、いはば心の鏡であつた。

藤村の「椰子の実」を朗詠せられる先生の若々しい美声は、今もなほ耳底に残つてゐる。異郷の渚に流離の涙を流す椰子の実のやうな、よるべなき悲しみの今の心に、しみじみとありし日の先生をしのんで、思ひは尽きないのである。

先生の長崎の歌をめぐる

奏 美 種

長崎の祇園の牛は何事もよしとうなづくト象のよさ

この歌は「青靄集」の「牛よせ」のなかに収められている。

明治末以来、姿を消していた長崎の祇園牛（紙張子、首振り牛）が、三十数年ぶりに復活して売りだされるようになった。長崎の郷土玩具古賀人形にも次ぐ、稚拙で楽しいものであったので先生にお送りした。このささやかなものを、先生はことのほか喜ばれて、御鄭重な御手紙と共に、この歌が送られて来た。「牛よせ」によると、……机の上に据ゑて「この牛を見ていると何となく気が暢々する。」と言つて賞めると、家人に「牛は牛づれといふが、貴方によく似てゐるからだらう。」と言はれた。「のろさがか？」と苦笑しながら、贈主への礼状を認めたまに……とあつてこの歌がかかれてゐる。

店主の市丸さんからの切な願ひ出があつて、先生に半折をお願いした。どうかと思つていたのに、快よく願ひをききいれていただいた。このあと、それを凸版におこし、和紙小形短冊に印刷され終戦頃まで祇園牛と共に長崎の名物となつていた。とくに先生の御人格そのままのこの歌は多くの人々に愛誦されていた。戦後この店が火災にあい、祇園牛の原型も先生の半折もやけて、今では長崎から祇園牛は姿を消している。

炎暑の処倍々の御平安ことに此度は立派なる歌集出で慶賀に堪へずいち早く一本恵与をうく多謝く読みもてゆくにそのかみの事回想窮まりなし

長崎や浜木綿の咲く山手町歌人美種の歌集出でたり

表紙面のユツカの花を先づ撫して原爆の歌に吸はれよみ入る

クラバ山のみどりの窓に赤彦がかかる歌見し今に忘れず

君がゐし活水校の女校主ホワイトにあひしいつにかありけむ

長崎の山手より来し浜木綿は三十年近く今に枯れざり

(三一・七・二八)

これは拙歌集「十二番館」をお贈りいたしました時に頂いたお手紙である。長崎に赴任した私は南山手の倉場富三郎邸内(現グラバー邸)に住み、先生をお迎えいたしましたのもこの邸であった。

浜木綿は長崎県の西のはて脇岬(現、野母崎町)で一夏をすごした時、たまたま浜木綿の群落を発見した。(當時村人達はこれをぼんばなといっていた)その一株を先生にお送りいたしましたのが、今日も春日邸にある浜木綿である。先生は夏毎に浜木綿の歌を下さったり、又浜木綿についての御消息を下さったりした。

歌のホワイト校長も現在米国加州パサデナで老をしづかに養つてをられ、倉場邸も今日ではグラバー邸とよばれ昔の面影もうすらぎ、長崎名所となり、長崎観光のドル箱となっている。

先生に話さなかつた失敗

黒 岩 駒 男

汽車は瀬戸内沿いの夜闇の中を走りつづけていた。三等寝台の窮屈な最上段に揺られながら眠りの来るのを私は待っていた。関門トンネルに入る頃に寝台に上り、家を出る時の娘の忠告通りアトラキシン二錠を服用したのだがなかなか眠れない。春日先生からいただいた紹介状を内ポケットに入れたまゝ上衣は脱いでチョッキだけになり、それでも寝苦しくてネクタイを思い切りゆるめる。明東京都に着き、休息無しで一仕事しなければならぬ、そのためには早く眠らなければという気持があるので余計眠れない。広島を過ぎたのははつきりおぼえてい

るが、さすがに何時の間にか眠つたらしい。目がさめた時はもう車内は確かに朝の光に満ちて、起き出した人のざわめきが伝わって来る。頭が重くてまだねむい。昨夜寝台の三階に上つてから、葉をのうとして水が無い事に気付いたものの、も一度降りて洗面所まで行くのが億劫で、唾をためて呑みこむという事をしたために、水分不足で葉の廻り方が遅れ、その分だけ葉のききめが朝に持ちこされてまだ残っているらしい。ぼんやりして目近く揺れる天井をながめていると俄かに雑音と一語にアナウンスがはじまって、間もなく大阪に着くことを告げるこれは寝すぎたと、ふらつく足をふみしめてはしごを降りて洗面所に来て見ると満員である。列車はもう大阪駅の構内に入っている。窓越しに見えるホームの洗面所は割に空いている。ひげは昨夕家を出る前にあたっていているからがまんする事にして、大急ぎで歯をみがき顔を洗い、飛び乗って見ると、列車の洗面所はまだ一杯の人だからである。がらにもなく抜け目なき我が振るまいに得意であった。

京都に着くとすぐ案内所で色々な予備知識を仕入れる。親切にしてくれた上に、今すぐ行けば駅食堂の早朝サービスに間に合うと教えてくれる。百円で熱い味噌汁つきの朝食、やすい上に此所のお嬢さんも愛想がよい。岡崎法勝寺町の宿に荷物をあずけて、京都大学へ行く。文学部の事務室でみると、遠藤先生はまだ見えていないが午後の講義があるので正午ごろには必ずおいでになるとの事で、図書館に行く。春日和男先生からの紹介の名刺を出すと、九大から移られた岩猿事務長さんが親切に係の人に指示を与えて下さる。伴信友校蔵書の中の言語四種別考を借り出して閲覧する。午まえに遠藤研究室に行く。しばらく待つ間に玉上さんから名刺をもらう。間もなく遠藤先生の部屋に通された。春日先生からいただいて来た紹介状をお読みになつて、色々先生のお噂をする。先日の京都大学国語国文開講五十周年のお祝いで諸先輩のお話があつたが、春日先生のお話が一番よかつたとおっしゃる。自分の事の様に嬉しくなつて思わず時がたつた。辞去して、百万遍で昼食をすまし、図書館にもどり、も一度借り出して調査をすまし、複写依頼の手続きをする。此の間、係の女性は常に笑顔であつたし岩猿事務長さんに調査終了の御礼を述べた際もにこにこ、九州の共通の知人の名をあげてなつかしがられた位であつた。事務長室を出て、ほつとして、玄關の段を降りようとして伏目になつた。昨夜の寝台車以来はじめて我が身のなりふりを意識したことになる。ネクタイは半ば解けたままチョッキの中に押しこんである。今朝か

ら会った人が皆にこにこと親切であったのは、実はこのための笑いであったのか。がっくり来てしまった。ゆかたを裏がえしに着て散歩に出た実績を一再ならず有する私ではある。ただ、事がゆかたに止まっていた間は、日本の着物の構造からいって、一度や二度、裏がえしで着たという経験をもつ方が普通なので、一度もその経験をもたないという方が人間放れがしているのだなどと強弁して来たのが、ネクタイとなるうちと通用し難くなる。東山通りで市電を降りて、疏水に浮ぶ藻の流れを見ながら宿に帰り着いた時には深い疲労をおぼえた。

これが、この旅のけちの着さはじめであった。伊勢の神宮文庫では、物理教室から借り出して持参のコンカール高良山本平家を写してもらったやつが故障する、接写装置の脚がゆるくなってカメラの重みでずり落ちる、陽は落ちかかるなどの条件で大汗を流し、翌日は一日宿で寝て、やっと帰って来たが、そのまま十日間程寝ついていた。ネクタイの一件は、今更の様に家の神さんを情け無がらせた。春日先生には手紙で御礼を申し上げただけで、失敗談は書かなかつた。お会いした時に話して笑っていただこうと思いつきながら、福岡まで出かける元気が出なかつた。昭和三十三年十一月のことである。翌年秋から入院、和男先生や、研究室の森山さんに講義に来ていただいた、三十六年春から授業だけは始めたものの、「治りました」と先生に申し上げる程の状態にはならなかつた。そして御逝去の電報を手にした時には、悲しみと後悔と惨めさと――何かに打ちのめされた様な気がした。私の様に、お世話になり、御心配をかけ、いたわられただけで、何一つ御期待にこたえることの出来なかつた弟子は一人も無いだろうと思うと、唇をかむばかりであった。こうして、あの旅行に出かける前に、京都への紹介状をいただきに伺ったのが、先生にお目にかかつた最後となつてしまった。

あの時の先生のお話し、京都の五十週年の祝いに出席された時のことや、先生の学生時代の京都田中の下宿をたずねられた時のことなど、たのしそうに話された様子が、いつまでも私にとつての先生の想出の最後に在る事だろう。それと一諸に、此の旅の失敗の想出が、不思議な位鮮かにまといつて離れないのである。そして、こんなつまらぬことを申し上げると、そんな時はいつもそうであったように、先生は天井を仰いで、低い声を立てて笑い、それからキッと正面に顔を向け直して、「イヤ、そんな話は始めてきくね」と言つてから、も一度笑われた事だろう。想出の中の先生が、そんな風に笑つて下さると少しゆるされた様で私は気が楽になるのである。

春日政治略歴

明治十一年四月一日 長野県上伊那郡美篤村下川手に春日弥七郎次男として誕生。(戸籍面は四月一日なるも、実際は四月五日)

明治十九年四月 長野県上伊那郡美篤尋常小学校へ入学。

明治二十年九月 父弥七郎死去。享年四十八

明治二十三年三月 右卒業。

明治二十三年四月 長野県上伊那郡伊那高等小学校へ入学。

明治二十七年三月 右卒業。(家事農業の手伝い。)

明治二十九年四月 長野県師範学校へ入学。(旧師の瘞めによるという。上級生に高野辰之・太田水穂・塚原俊彦(島木赤彦)の諸氏在学。)

(島木赤彦)の諸氏在学。)

明治三十三年三月 右卒業。

明治三十三年四月 長野県北佐久郡中津尋常小学校訓導。

明治三十四年四月 東京高等師範学校予科へ入学。

明治三十五年四月 同校本科国語漢文部へ入学。(恩師に保科孝一松井簡治の諸氏、同期生に神保格氏あり。)

明治三十八年三月 右卒業業。

明治三十八年四月 岡山県立津山高専女学校教諭。

明治四十年四月 大阪府立今宮中学校教諭。

明治四十一年九月 京都帝国大学文科文学科へ入学、国語学専攻。(恩師に新村出・藤井乙男・吉沢義則・幸田

露伴・厨川白村・内藤虎次郎・上田敏の諸氏同期生に友枝照雄・青木正児・有高巖の諸氏。)

右卒業。

奈良女子高等師範学校講師を嘱託される。

明治四十四年七月 同校教授に任ぜられる。

大正二年四月 同 年十二月 長野県上伊那郡朝日村有賀春太郎次女イサヲと結婚奈良市外法蓮村四番地に居住。

大正四年二月 長男和男誕生。

大正五年十二月 次男保男誕生。

大正八年四月 居を奈良市東笹鉾町四十八番地に移す。この頃より大矢透博士と親交。

大正十年十月 文部省視学委員を命ぜられる。

大正十一年七月 三男茂男誕生。

この頃京都高等工芸学校および京都女子高等専門学校に国語科講師としてしばしば出講。

九州帝国大学教授に任ぜられ、法文学部勤務、

国文学講座担任を命ぜられる。同年六月、単独赴任。同年八月、家族を伴い、福岡市下警固大

鋸谷一九四番地に移転。

昭和三年二月 九州帝国大学法文学部長に補せられる。

昭和三年二月 九州帝国大学法文学部長に補せられる。

昭和三年二月 九州帝国大学法文学部長に補せられる。

昭和三年二月 九州帝国大学法文学部長に補せられる。

昭和三年二月 九州帝国大学法文学部長に補せられる。

昭和四年三月 法文学部長を免ぜられる。

同年八月 母もと死去、享年八十二。

この頃より福岡県立女子専門学校、同女子師範学校および私立西南学院高等部に国語科講師としてしばしば出講。

昭和五年十月 居を福岡市馬屋谷一六一番地に新築し移る。

昭和十一年三月 九州帝国大学付属図書館長を命ぜられる。

昭和十一年九月 文学博士の学位を授けられる。(提出論文「仮名發達より見たる国語文体の成立」京都大学)

同年九月 昭和十一年度視学委員を嘱託される。

昭和十二年五月 日本學術振興會委員會昭和十二年度国語国文学部臨時委員を嘱託される。

同年七月 昭和十二年度福岡県中等教育視学委員を嘱託される

同年十月 台北帝国大学における帝国大学付属図書館長會議に出席台湾を視察。

昭和十三年一月、京都帝国大学文学部に非常勤講師として国語学概論を講義。

昭和十三年三月 願いに依り九州帝国大学教授を免ぜられる。

昭和十四年九月 九州帝国大学名誉教授となる。

昭和十五年一月 財団法人斯道文庫長に就任。

昭和十六年六月 国語審議會臨時委員を嘱託される。

昭和十七年十月 北京大学講師として出講。華北滿州を視察。

昭和十九年一月 著書「西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究」により西日本文化賞を授かる。

昭和二十年三月 九州大学法文学部における講師を嘱託される。

昭和二十年五月 著書「西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究」により帝国学士院賞を授かる。

昭和二十二年一月 福岡高等学校(旧制)講師を嘱託される。

同年三月 福岡県女子専門学校・私立福岡経済専門学校に国語科講師として出講。

昭和二十四年四月 私立西南学院大学教授を命ぜられる。

昭和二十五年十月 日本学士院会員となる。

間昭和二十八年より三十一年まで 九州大学文学部における講師を嘱託され、国語学を講ずる。

昭和三十年七月 札幌における万葉学会に出席。北海道および東北地方を旅行。

昭和三十三年三月 西南学院大学教授を退く。

(この頃より強度の神経痛にて治療、その都度軽快する。)

昭和三十七年六月三十日 大腸回盲部癌腫のための心臓衰弱により福岡市馬屋谷一六一番地の自宅において死去。享年八十四。

(同年春以来胃腸を害し、三月上京以後食慾なく衰弱に向う。五月の学士院授賞式出席を見合わせ、十六日九州大学医学部第二内科勝木教授の診断により病状確定。自宅療養を瘳められる。)

同日付をもって正三位勲二等に叙せられる。

昭和三十七年七月三日 福岡市東型柏明光寺において葬儀。

法名天章院政岳治道居士。

昭和三十七年十一月十七日 遺骨を郷里長野県伊那市美簗下川の墓地に埋葬。(春日和男編)

春日政治著作年譜（総目録）

凡 例

一、これは、故春日政治の著作論文を中心に、放送・講演等口頭発表のものをもなるべくつけ加えた年譜である。
 一、口頭発表のもので、後にその概要が印刷されたものは、その公刊年月の場所にこれを掲げて重複を避ける。
 一、論文集・随筆集に収められたものについては、標題の下に次の様な符号を付ける。

国語叢考。 万葉片々。 古訓点の研究※ 随筆青靄集※※

一、参考文献

- 文学研究・第二十三輯（春日博士還暦記念日本文学特輯昭13・6・30）春日政治博士著作年譜
 古訓点の研究（昭31・6）著者訓点関係著書論文目録
 万葉・第四十五号（昭37・10）春日政治博士万葉集関係論文目録
 国語学・第五十一輯（昭37・12）春日政治国語学関係著述論文目録
 訓点語と訓点資料・第二十五輯（春日政治博士追悼号 昭38・3）
 春日政治訓点語学関係著述論文目録

（編者春日和男識）

明治三十七年（一九〇四）

三月 予の解したる道徳経の思想（東洋哲学史の論文）⁽¹⁾

明治三十八年（一九〇五）

三月 詩経の律格（支那文学史の論文）

明治四十二年（一九〇九）

六月 日本文章の発生及び発達の特状（日本文脈論の試験答案）⁽²⁾

明治四十三年（一九一〇）

六月 和歌と俳句（近世国文学史の論文）

同 明治文学における口語（国語学の論文）

明治四十四年（一九一一）

五月 日本に於ける漢字の首値（国語学の卒業論文）

同 詩の国風について（大家学友会誌）

大正 五年（一九一六）

一月 国語瑣談一（信濃教育）⁽³⁾

二月 同 二

四月 同 三

十一月 新体女子文法 上下二卷（修文館）

大正六年(一九一七)

- 三月 曲譜をつける歌詞につきて(佐保会誌)
- 六月 「国語の研究」を読み(奈良県教育)
- 同 女ことば(佐保会誌)
- 十月 国語瑣談四(信濃教育)

大正七年(一九一八)

- 一月 国語瑣談五(信濃教育)
- 同 ウマといふ語(大和日報)
- 三月 「佐保」名義私考(佐保会誌)
- 七月 尋常小学国語読本の語法研究(修文館)

大正八年(一九一九)

- 一月 ヒツジといふ語(大和日報)
- 五月 幼児の言違へ(佐保会誌)
- 八月 法華経音訓 断簡(古木版新刷)

大正九年(一九二〇)

- 二月 真田信之の和歌(歴史と地理)
- 五月 地名「クマ」・「コマ」私考(歴史と地理)
- 同 女子実用文法 上下二卷(中文館)
- 七月 徒然草に見えたる衣食住のこと(家事研究) ※※
- 八月 同 二※※
- 九月 同 三※※

- 十一月 「奈保」名義私考(大和考古学会会報)⁽⁴⁾
- 同 言語から見た婦人(家事研究) ※※

大正十年(一九二一)

- 二月 地名より観たる大和(大和考古学会会報)
- 三月 知らず語り(佐保会誌)
- 四月 聖徳太子(子供の為に)
- 同 旧訓十七条憲法(パンブレット)
- 五月 鎌倉時代の武士詞(歴史と地理)

大正十一年(一九二二)

- 四月 春日今朝藏君をしのぶ(佐保会誌)
- 六月 螢狩の童謡(家事研究) ※※
- 十月 子供を謳へる一(家事研究)
- 十二月 だてとめあて(かながきのすゝめ)。

大正十二年(一九二三)

- 同 童謡 月見草(目黒書店)
- 二月 真土山(奈良文化)。
- 三月 校訂法王帝説 油印
- 五月 かながきの読みにくいといふ人に(母と子)。
- 六月 子供を謳へる二(家事研究)
- 七月 同 三

- 同 万葉神観(敬神教育)
- 八月 柿本人麻呂(家事研究)
- 九月 子供を謳へる四(家事研究)
- 十一月 新体中等国文法 一卷(星野書店)

大正十三年(一九二四)

- 二月 「神の薫」を読んで上(敬神教育資料) ※※
- 三月 同 中 ※※

同 作を通して見たる人麻呂(やまと)

四月 「柿の薰」を読んで下(敬神教 資料) ※※

六月 奈良朝人の擬声語(奈良文化) •

十一月 新編女子国文 十卷(藤井乙男博士と共編)(修文館)

大正十四年(一九二五)

五月 万葉集の肥人について(奈良文化) •

十月 「永代蔵」と「胸算用」(家事研究) ※※

十一月 新修女子文法(修文館)

大正十五年(一九二六)

四月 書齋閑語——信友書入の万葉集——(奈良文化) •

六月 金のひとや(英文童話訳家 事研究)

九月 山居口号(佐保会誌)

十月 久保田さんの事ども(アララギ赤彦追悼号) ※※

昭和二年(一九二七)

一月 万葉国「都久志」郷土古文学の尊重(福岡日日新聞)

二月 撰集万葉徴について(アララギ) •

四月 海の哀話(福岡日日新聞) ※※

四月 撰集に採られた万葉集の歌(奈良文化) •

七月 書齋閑語——万葉考種信本——(奈良文化)

八月 瓊夏漫筆(福岡日日新聞) ※※

九月 古今集刪修と万葉集の歌一(国語国文の研究) •

十月 同 二 • 認字の和訓についての疑問(奈良文化) •

十一月 桃山時代の口語について(福岡県国語漢文学会講演要旨)

パンフレット印刷)

昭和三年(一九二八)

一月 歳次聯想——憶良と旅人——(福岡日日新聞)

同 国語史上の一劃期 文隆伊曾保を中心とした語法一(新潮社日本文学講座)

文学講座)

二月 国語史(文献書院国文学講座)

七月 古訓点の調査を中心とした大矢博士の研究(国語と国文学) ※

七月 国語史上の一劃期 文隆伊曾保を中心とした語法 二(新潮社日本文学講座)

本文学講座)

十一月 方言聯想一二(奈良文化) •

十二月 敬讓助動詞マラスルについて(国語国文の研究) •

昭和四年(一九二九)

五月 万葉人の歌へる北九州(能古(五・六・七・八・九・十一月))

十一月 速水行道のことども(奈良文化)

同 中等日本文典(星野書店)

十二月 仮名文字の起源(放送)

昭和五年(一九三〇)

一月 青柳種信の事ども(能古) ※※

同 雲出鳥還処断想(からまつ)

三月 短歌に比較したる俳句一(天の川)(以下四、五月各号) ※※

四月 万葉人の歌へる北九州(能古)(前年十一月号に続き以下五月号まで)

五月 認字和訓再号(奈良文化)

七月 春野集を見る(能古) ※※

八月 雲出島還処漫談(能古) ※※

十一月 万葉集の筑紫歌(放送) ※※

昭和六年(一九三一)

一月 青柳種信の「島門」の考から(能古)

二月 偶々おもへる事(九大国文学会誌) ※※

三月 万葉集の訓義と古経卷の施点(万葉集論纂)・

同 雲出島還処漫筆(能古)

五月 九州方言講座の後に(5)(放送講演集・九州方言講座)

七月 小松君の事ども(小松武平追想録)

同 調須磨子の君をしのぶ(調須磨遺稿集)

九月 マイスルといふ語(九大国文学)。

十月 仮名と文体(京都国文学会講演)

十一月 甌島に遺れるマラスルとメーラスル(九大国文学)。

同 九州と文学(九大国文学) ※※

昭和七年(一九三二)

一月 歳次聯想——壬申の年の歌——(九州日報)・

二月 仮名の発生に関する考察(松井博士古稀記念論文集)

三月 片仮名交り文の起源について(文学研究) ※

六月 古代の歌と九州改造社(短歌講座)

同 金光明最勝王経註釈の古点について(日本女文学論纂) ※

同 山居小話(九大国文学会誌) ※※

七月 文法教授観(福岡県女子専門学校講習会)

十月 古訓漫談(文学研究)。

昭和八年(一九三三)

一月 成実論天長点統貂(国語国文) ※

三月 「小学方言講義」より(文学研究)

四月 仮名発達史序説(岩波講座日本文学)

六月 小閑徜徉(九大国文学会誌) ※※

昭和九年(一九三四)

一月 万葉集を通して観たる古代の国民精神(八幡興風会講演
要旨パンフレット)

同 高野山にて観たる古点本一二※付「首 多岐」考(文学
研究)。

同 上代文体の研究(上代日本文学講座)。

六月 陳列余談——九州の仮名資料——(九州大学新聞) ※※

同 厩谿偶語(九大国文学会誌) ※※

同 梅霖聯想(九州日報) ※※

同 綜合無量寿経を読む(福岡日日新聞)

同 片仮名の研究(明治書院国語科学講座)

七月 文字及び文体より観たる国文学(文部省開權講習会)

同 国語科小観(福岡師範学校講習会講演)

八月 夏から秋へ(放送) ※※

同 宇治拾遺物語の一本より(文学研究)

十一月 聖語藏御本中観論の古点について(京都帝国大学国文学
会二十五周年記念論文集) ※

昭和十年(一九三五)

一月 歳次聯想——亥の年——(福岡日日新聞) ※※

同 序文(瀬古確著「大伴家持の研究」)

二月 石山の石から(九大国文学会誌)。

同 片仮名の研究(改造社日本文学講座)

同 国語資料としての訓点の位置(国語・国文)※

六月 万葉考をめぐって(九大国文学会誌)

十月 仮名の発達より観たる国語文体の成立(学位論文)

十月 菊について(放送)※※

十二月 金光明最勝王経註釈一本の古点について(文学研究)※

昭和十一年(一九三六)

二月 種齋と海量(福岡日日新聞)※※

三月 「万葉考をめぐって」補正(九大国文学会誌)

四月 灌仏の聯想(九州大学新聞)※※

七月 凡上小篇(九大国文学会誌)

八月 九州と上代文学(九州帝国大学夏季講習会講義)

同 万葉集卷十一の解釈(楽浪書院万葉集総釈第六)

同 新国文の展開(放送監督行事者講習会)

十月 和漢の混淆(国語・国文)※

十一月 十年所感(九大国文学会誌)

同 十年十年又十年(行路譜)

同 九州と上代文学(放送)

昭和十二年(一九三七)

一月 牛よせ(福岡日日新聞)※※

三月 狂言詞覚書(九大国文学会誌)。

四月 長秋長歌集について(背振)

六月 柳園資料——宣長の書簡——(九大国文学会誌)

九月 法王帝説禰考(国語と国文学)

十一月 法王帝説統考——掖齋の証註について——(文学研究)

同 西大寺本金光明最勝王経の白点について(九州大学法文学部十周年記念論文集)※

昭和十三年(一九三八)

二月 日本の敬讓語について(日本諸学振興委員会研究報告Ⅱ)

三月 西府梅花宴(九大国文学会誌)

五月 国語科雜観(福岡市国語研究会講演)

同 国文学と仮名(法文学部記念講演)

六月 聖語藏御本央掘魔羅経の字音点(文学研究)※

十月 国語問題展望(国語・国文)。

同 古点の況字をめぐって(国語と国文学)※

十二月 万葉集と女性(放送)

昭和十四年(一九三九)

三月 古代文学に於ける女性(さくら)

五月 隨筆青靄集(岩波書店)

昭和十五年(一九四〇)

一月 斯道文庫藏本願經四分律(国語 国文)※

二月 聖語藏御本阿毗達磨雜集論の古点について(安藤教授記念論文集)※

四月 皇紀二千六百年(斯道文庫報)

五月 御民吾の歌解(東洋教学振興会発会式における講演)

九月 山田孝雄博士著「国語の中に於ける漢語の研究」を読む

(国語と国文学)

- 六月 誠の心(麻生塾における講演)
- 十月 時局と教育(大牟田教育会記念講演)
- 十一月 国歌「君が代」に就いて(福岡日日新聞)
- 十二月 校本宇津保物語に叙す(西村宗一笹淵友一校校本うつほ物語俊藤卷)
- 昭和十六年 (一九四一)
- 四月 仮名小考(文学)。
- 十一月 仮名の沿革(朝日新聞社国語文化講座)
- 十二月 筆を擱いて(斯道文庫報)
- 昭和十七年 (一九四二)
- 八月 飯塚訪書行(斯道文庫報)
- 十月 「哲女」の訓(万葉雜記)。
- 十二月 西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究乾坤二冊(斯道文庫紀要)(岩波書店)
- 昭和十八年 (一九四三)
- 五月 愛国百人一首と九州(斯道文庫報)
- 八月 玖珠紀行(斯道文庫報)
- 十二月 古訓語彙小攷(文学研究)。
- 同 都久志に叙す(都久志)
- 同 斯道文庫第五周年に当りて(斯道文庫報)
- 昭和十九年 (一九四四)
- 三月 古典と前線西日本(月刊西日本)
- 同 小川本大乘掌珍論天厯点(国語国文)※
- 十月 金剛般若経讀述嘉祥点(国語学論集橋本進吉博士還曆記念会)※
- 十二月 刊後殘筆(斯道文庫報)※
- 昭和二十二年 (一九四七)
- 九月 国語叢考(新日本図書株式会社)
- 昭和二十三年 (一九四八)
- 三月 一八五〇年和訳の馬太伝(文学研究)
- 四月 万葉片々(丁字屋書店)
- 五月 十年又十年(九大国文学会誌復刊号)
- 同 黄沙(俳誌みすゞ)
- 十二月 にひなへ(村の科学)
- 昭和二十四年 (一九四九)
- 四月 新註註壘中納言物語(春日和男と共編)(成潮社)
- 昭和二十五年 (一九〇五)
- 三月 聖書和訳の一資料(西南学院論集)
- 八月 序文(高橋さやか著「保育のための文学」)
- 昭和二十六年 (一九五一)
- 五月 契沖の語学(語文)
- 昭和二十七年 (一九五二)
- 一月 「訓点資料と訓点語の研究」を読む(国語学)⁽¹⁰⁾
- 四月 校註徒然草新抄(春日和男と共編)(藤野書房)
- 六月 土佐日記といふもの(新註国文学叢書月報)
- 十月 初期点法例——聖語藏点本を資料として——(国語国文)※

昭和二十八年（一九五三）

七月 法華経玄贊の古点について（文芸と思想）※

十二月 正倉院聖語蔵点本の調査（日本学土院紀要）※

昭和二十九年（一九五四）

八月 語彙雜考（国語学）※

昭和三十年（一九五五）

二月 「取与呂布」私考（西南学院大学文学論集）

五月 古訓雜記（訓点語と訓点資料）※

九月 万葉集と古訓点（万葉大成美論篇補遺）

十月 「毛無乃岳」の訓（万葉）⁽¹²⁾

十一月 聖語蔵本菩薩善戒経（国語国文）※

同 おもい出（今中自彊会報）

昭和三十一年（一九五六）

六月 らくがき（どうだん）

同 古訓点の研究（風間書房）

同 おもい出（京都大学文学部五十周年史）

十月 国語の母音同化（語文研究）

昭和三十三年（一九五七）

一月 筑紫の郎女（どうだん）

九月 古代文学と九州（西日本国語国文学会佐賀における講演）

昭和三十三年（一九五八）

三月 同窓会報に寄せて（九州大学文学部同窓会会報）

同 万葉の旅九州路（角川書店日本古典鑑賞講座万葉集）

同 野村望東尼全集を読む（西日本新聞）

同 石山寺本金光明最勝王経古点より（国語国文）

（四月）丸山君をしのぶ（丸山弁三郎追想録）

十一月 九州万葉談（京都大学国語学国文学会五十周年記念講演）

昭和三十四年（一九五九）

五月 万葉集と九州——ことに巻五について——（万葉集注記月報）

九月 「古点本の国語学的研究（訳文篇）」を読んで（国語学）

十一月 源氏物語の俗訳本（文芸と思想）

昭和三十六年（一九六一）

十月 序文（大野透著「万葉仮名の研究」）

註

（1）以下の二論文は東京高等師範国漢科時代のレポート（未刊）。

（2）以下の三論文（試験答案を含む）は京都帝国大学文科大時代代のレポートおよび卒業論文（未刊）。

（3）春日政治国語学関係著述論文目録（国語学五一）では「国語教育および国語問題」の項目に入れたが、語彙論であって、「国語学および国語史一般」の項に入れるべきもの、以下大正七年一月のものまで同じ。

（4）春日政治博士万葉集関係論文目録（万葉四十五）では「奈良」名義私考となっているが「奈良」（聖武天皇陵の地名）である。

（5）昭和六年三月十六日放送。

（6）昭和十三年十二月山本有三著「ふりがな廃止論とその批判」に再掲。

- (7) 昭和十三年十一月「古代文学と女性」と題し、長崎県立佐世保高等女学校における講演。
- (8) 普及判(研究篇のみ) 同時に発刊。昭和二十四年八月丁字屋より再刊。
- (9) 同年一月放送の原稿。
- (10) 遠藤嘉基著「訓点資料と訓点語の研究」改訂版二十八年十一月刊に再掲。
- (11) 昭和二十九年五月 国語学会総会にて講演。
- (12) 同年七月札幌における万葉学会にて「思い出すことども」と題して講演した内容の一部。
- (13) 昭和二十七年十月国語学会福岡における講演。

編集後記

一年前のあの夏の夜、にわかなしらせに山道を急がせた自動車の間隙を、深い真暗な闇が包みこみ、どこまでも車を追ってきた。その中で、私どもは、何かが大きく崩れ落ち、光が消えたことを、いたく感じていたのだ。

いうまでもなく、広くて深い先生の学問を受け継ぐとともに、新しい勇気を振り起して、ひとりひとりがその闇を切り拓いてゆくのが、後に残された者の嚴肅なつとめであろう。この特輯号を今、先生の霊前にお供えする。これを以て、故先生に御安心を願うには、十分でないものも、もとよりある。しかし、これは右のようなわれわれの心のあかしの一つである。在天の先生は必ずや、あのにこやかな笑顔を以て、このささやかな企てを嘉納して下さるのであらう。御執筆の同窓諸賢には、学年末の御多忙の中を、短期間に御無理を願ったところ、何れも、快く御引受けいただいた。また著作総目録と年譜の作製は、御令息和男氏にお願いした。

また未亡人より本号発行費の一助として、多額の御寄附を得た。御好意に対し、厚く御礼申し上げます。

なお今回は特集増大の故を以て、特別会費とする事に、会員諸氏の御諒承を願いたい。

(編集当番 福田・今井)